

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(36) 平成13年12月1日

藩校・寺子屋で使用された教科書(その1)

藩校と教科書・『四書』(K081/18)『五経』(K081/85)

近世は士農工商の身分制度が確立していた時代であり、武士と庶民は明確に区別されていました。各藩主が藩士の人材育成のために城下町に設けたのが藩校であり、庶民のため日常生活に必要な読み書きを教授する学校が寺子屋でした。藩校は18世紀末頃になってから普及し始め、幕末には二百数十校を数えるにいたりしました。

藩校の教科内容は、江戸幕府直轄の昌平坂学問所(昌平覺)の影響を受けており、漢学(儒学特に朱子学)を中心としており、これに武芸を加え文武両道を教育理念としていました。従って、藩校の教育の中心となる儒学の教科書は、主として『四書』『五経』と『孝経』でした。孝経は論語とともに、我が国では最も広く読誦され、国民道徳に深く影響を与えた経書です。

児童は、数え年8歳から10歳の頃に漢学に触れるようになりますが、最初は「素読」といって意味を考えずに、文字だけを声に出して読むことの繰り返しでした。四書五経は最初の読物として好んで用いられた教科書で、実際には訓点を付した、読み下した文で学んでいました。「読書百遍義自通ず」や「論語読みの論語知らず」と言われるように、当時の藩の子弟は經典の内容の理解よりも暗誦することが主でした。

『四書』(K081/18)とは『大学』『中庸』『論語』『孟子』を指し、中国・宋の時代、程子により『礼記』の中から『大学』『中庸』が独立した一書とされ、その後朱子により『論語』『孟子』と合わせられ、儒学の基本文献として尊重されました。日本では13世紀初頭、新注(中国、宋代の儒学者、特に朱熹(朱子 1130-1200)により經典につけられた注釈)が将来され、主任教授である博士家などにより講読されました。広く理解されるようになるのは江戸時代、藤原惺窩(1561-1619)とその門人・林羅山(1583-1657)により、新注が本格的に紹介されてからです。特に林家は昌平坂学問所の大学頭として代々その職を継ぎ、朱子学の普及に大いに貢献しました。

また『五経』(K081/85)は『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の、最も基本的な五つの經典であり、前漢の武帝(在位紀元前141-87)が、この五経を講じる職務の「五経博士」を置いたことに始まります。日本には513年、継体天皇(450-531)の時代に、百済が大和朝廷に五経博士が派遣されたと『日本書紀』にあります。

四書五経の学習は、江戸時代後期には下級武士や庶民の間にまで普及し、君臣・父子・夫婦などの名分秩序の意識が浸透させていった半面、読書能力を養い教養を身に付けるなど、人民の文化水準の向上に果たした功績は大きい。平成13年12月、内親王の名と称号の出典に、『孟子』の言葉が使われるなど、四書五経は現在も、日本人の生活の中に息づいていると言えます。

藩校で素読の学習が終了すると、教材の内容の意味を理解・解釈することを学び始めます。朱子学派の藩校においては、道徳訓話を要約した『小学』(K081/22)や朱子により「道学者」の著作や語録を編纂した『近思録』(125.4/16)が朱子学への格好の入門書として広く読まれました。

【参考文献】

『日本庶民教育史』(372.10/イ)

『四書五経入門』(080/119-320)

当館所蔵『四書』(123/42)『論語』
読み下しのための訓点が施された論語。
中には朱筆の書き込みが見られ、地名
は右側に、人名は中央に1本、書名には
中央に二本の朱線を引くなど、当時
固有名詞に朱線を施して覚えていました。